

川端康成『山の音』論

——信吾と菊子の関係性をめぐって——

種 岡 尚 子

第一章 山の音における夫婦のあり方

第一節 憧れがもたらした悲劇

信吾と保子夫婦は「信吾は少年のころ、保子の姉にあこがれ」、保子は「美男の義兄が好き」で、「やはり姉にあこがれてゐた」というところから始まっている。

三十幾年後の今、信吾は自分たちの結婚がまちがつてゐたとは思つてゐない。長い結婚は必ずしも出発に支配されない。と、信吾は夫婦生活を振り返つて思つているが、

保子の姉のおもかげは、二人の心の底にあつたわけだ。信吾も保子も姉の話はしないけれども、忘れたわけではなかつた。となつてゐる。『山の音』は、信吾からの視点、心情から成り立っている。保子の役割は、

信吾は保子の鼻をつまんで振るやうにする。まだとまらな
い時は、咽をつかまへてゆすぶる。それは機嫌のいい時で、
機嫌の悪い時は、長年つれ添つて来た肉体に老醜を感じる。

とあるように、その存在は、姉と対極の位置にあることを指し示すためにあるといつても、過言ではない。保子の姉は若くして死んだので、信吾の中では、いつまでたつても、若く、美しいままである。一方、現実世界で生きている保子は美しくなく、当然のように老いていくのみである。「山の音における家庭」で、磯貝英夫氏は、

信吾が保子と結婚したのは、すこしでも亡き人の近くにいたい願望からであつただろう。

一種の運命論者であるかれの発想では、すべての原因は、最初のボタンのかけちがいに帰せられる。保子の姉と結婚で

きなかつたことが、すべてのまがまがしさの第一原因なのである。

と述べている。叶うはずのない姉への執着が、老いてなお、夢や妄想に形を変えて信吾を離さないのである。

生前は勿論のこと、死んでからも、信吾の心に絶対的な存在として生き続ける保子の姉は、尾形一家の人間関係の不協和音の大きな一因であると考えられる。保子の姉の容姿に関する描写は、「ほっそりと色白の菊子から、信吾は保子の姉を思ひ出した。」とあるだけで、それ以外のことは、はっきりとは分からない。

保子の姉は、

「私は父の盆栽のお手伝ひはしませんでした。私の性質にもよるでせうけれど、父が姉ばかり可愛がるといふ気持ちがあつたんでせうね。私も姉に参つてみましたから、ひがむつてばかりぢやなく、姉のやうに出来ないと恥づかしいから。」

という、保子の言葉から分かるように、細やかで、愛されて育つた故の素直な優しさを持った性質の持ち主だつたと思われる。鶴

田欣也氏は

義姉は個体を持った人間というよりは美という観念を具現した存在だからである。ひとというよりむしろ抽象化され固定されたイデーに近い。

と述べている。

信吾は、菊子が「これからは、お父さまの御覧になるものは、なんでも見ておくやうに気をつけますわ。」というのに対して、「自分の見るものをなんでも相手に見ておいてほしい、そのやうな恋人を、生涯に持つたことはなかつた」と感じている。ここで、妻ではなく、恋人となつているところが、大変、信吾らしい。妻という現実的な、生活色を帯びた存在ではなく、どこまでも、理想化できる余地のある存在を求めているのである。

保子には彼を現実に取り戻そうというきわだつた行動や言語はない。保子には、信吾の向かう側に引かれていくという意識さえ見えない。少なくともそのように信吾の目には映っている。また、そういう行動をしなくても、不美人である彼女の存在そのものが現実にいることを思い知らせてくれる仕組みになつてい⁽³⁾る。

と、鶴田欣也氏は述べている。現実と美は、両極端の世界にあつて、お互いに交わりあうことは決してないのである。

房子が生まれた時にも、保子の姉に似て美人になつてくれないかと、信吾はひそかに期待をかけた。妻には言へなかつた。しかし、房子は母親よりも醜い娘になつた。

信吾流に言ふと、姉の血は妹を通じて生きては来なかつた。

信吾は妻に秘密の失望を持った。

とあるように、保子はこの時点で、「理想の国の人」である姉と、繋がりのある人間ではないことが決定してしまったのである。ゆえに、信吾は美しい修一の嫁、菊子に姉の姿を見ようとするのである。

信吾と保子の夫婦は、同じ時間を過ごしながらも、同じ空間を生きてはいなかったのである。この夫婦関係のズレが、子供達夫婦の結婚生活に影響しているのは、必至であるといえるであろう。

注(1) 長谷川泉・鶴田欣也編『山の音』の分析研究』昭和五十五年十二月二十五日 南窓社 百三十八頁。

(2) 鶴田欣也『川端康成論』昭和六十三年三月三十日 明治書院百八十頁。

(3) 前注に同じ。百八十九頁。

第二節 もみじの世界

信吾と保子の絶対的価値基準になっている姉の田舎は、信州であり、そこにあつたもみじが姉の思い出と、常に重なって思い出されている。信吾と保子と結婚の場面で、鶴田欣也氏は

盃をあげるとき庭に栗の実が落ちるのだが、これが信州、すなわち理想郷からの追放を象徴する。信州を去ることによつ

て、この空間は現実の時間の流れから隔てられ、一種の永遠性を獲得する。信州では時間が凍結しているから、信吾の頭の中では美しき姉は当時のままの姿で生き続けるのである。⁽¹⁾と述べている。信吾にとつて信州はそれだけ特別な場所であり、永遠に到達できない場所なのである。

もみじが盆栽であつたことも、姉の女神的な存在を助けていると思われる。それは、盆栽が、長い年月をかけて作られるものだからである。一朝一夕に出来上がるものではなく、丹精をこめ、自然とも融合しながら作り上げられることにより、美術品となり、そこに、伝統が宿るのである。菊子が姉の身代わりになることが出来たのは、単に、美しかったから、というだけではなく、菊子が、

あごから首の線が言ひやうなく洗練された美しさだつた。一代でこんな線は出来さうになく、幾代か経た血統の生んだ美しさだらうか

とあるように、長い時間をかけ、はぐくまれた、日本の伝統的な美しさを持つていないからではないだろうか。

姉は、日本の美であり、それを象徴するのがもみじの盆栽なのである。信州は信吾にとつて過去の世界である。過去の世界は永遠であり、その世界に流れる四季はとどまることなく、繰り返さ

れるのである。盆栽は信吾の心象世界で永遠に生き続けるのである。

姉は死ぬことによつて、絶対的な美を確立し、信吾の中で不動の地位を得た。信州は理想の国であるが、その先に待つのは、未来や、青春ではなく、死である。

美しい義姉のいる、向こう側とはどんな世界なのだろう。時間的にいえば過去の世界であり、失われてしまった世界である。義姉が死んでしまつて以来、信吾の頭の中では時間の流れを止めてしまつた世界である。しかし、義姉を中心にしたこの世界はいつでも彼の記憶から数十年前と一寸たがわず再生できる世界である。このように、明確に浮かび上がつてくる空間は一種の別世界である。それは、失われた楽園でもあるし、また時間の流れない異界冥府でもある。

と、鶴田欣也氏は説いている。信州は美や、芸術、そして夢が死という絶対的なものと危ういバランスで絡み合っている世界なのである。信吾の世界は、もはや、信州にしかないと位置づけられるであろう。

注(1) 武田勝彦・高橋新太郎『川端康成・現代の美意識』昭和五十三年五月二十五日 明治書院 七十二頁。

(2) 鶴田欣也『川端康成論』前出。百八十二頁。

第二章 菊子と桜

第一節 桜と八つ手

もみじが姉の思い出と常に重なつて登場するように、季節を問わずに登場する桜は菊子を象徴している。鶴田欣也氏は菊子が

桜によつて陰影が深くなり、かつ、彼女がその性格上果たせないことを桜が代行することも出来る。その一つは時計としての自然である。菊子は、美しき姉、即ち永遠の霊媒である以上、あまり急激な時間による変化があつてはならないが、桜は、その点自然のサイクルの一部であるので、信吾のために花をつけたり、葉を落としたりして、時を刻み、時間の不可避性を伝えることができる。⁽¹⁾

と述べている。桜の根元には八つ手が茂っており、この八つ手が桜の成長を阻んでいる。

信吾は八つ手をきれいに根絶やしにするつもりだったが、そのままにしておいた。

桜の花は空に大きく浮いてゐた。色も形も強くないが、空間に満ちた感じだ。今が盛りで、散るものとは思へない。しかし、一ひら二ひらづつ、絶え間なく散つてゐて、下には落花がたまつてゐた。

八つ手を掘り起こさない、ということとは、信吾が、菊子の抱えている問題を根本から解決しようと考えていないことの表れである。修一と菊子の夫婦関係の改善が上手くいかないのは、信吾が菊子に甘え、菊子が信吾に甘えていることも手伝っているのだ。

羽鳥徹哉氏は

修一にいやなことがあっても、修一にまともなぶつかるのではなく、信吾の庇護の下に逃げこむことで、修一とのかつことを解消している。外でいじめられた子供が、いじめっ子に自分で立ち向かうのではなく、親の所へ逃げてくるのと同じである。信吾がつき離せば、菊子は修一とぶつかり、離れるか付くか、どちらかに決定しないわけにはいかなかったろう。信吾の菊子へのいたわりが、修一と菊子の関係をあいまいにし、修一の浮気をずるずると長びかせていたとも言える。しかし、菊子は信吾の慰めであり、明りである。老いや死の恐怖も、生涯の悔い、家族のわずらいも、菊子によって癒されることが多い。しかし、その菊子に執着することが、修一の浮気を長びかせ、房子の不幸を助長するようにも作用する。菊子への愛は、喜びであり、不幸の助長でもある。このジレンマをどうするか。それが作品『山の音』の主要な問題である。²⁾と述べている。根絶やしにできなかった結果として、菊子は中絶を

し、潔癖は踏みじられてしまう。桜の成長を妨げている八つ手は、悩みの原因である修一や、絹子であるのはもちろんだが、実は、なかなか、菊子を解放しない、信吾自身でもあるのである。

信吾が、現実世界を生きる菊子の問題解決のために立ち上がることを、それは、信吾自らの手で、姉へ通じる唯一の道を閉じるということを意味する。信吾はこのことに、氣付いてはいるが、まだ、葛藤の只中にいるといえるだろう。村松定孝氏はこういった信吾の心情の中に、

人生の黄昏にあつてなお生命のあこがれに酔い、孤独の中にもいしれぬ歡喜にひたろうとする老人のあやかな色³⁾氣と信吾の老いを指摘している。このあやかな色氣を、信吾は菊子から吸収しようとしていたのである。菊子に甘えることにより、持続的ではないが、若返り、時間を逆行させ、死の恐怖、「山の音」から解放されていたのである。であるから、実際の菊子の変化を遂げ、姉から遠い存在になってしまったとき、即ち、保子や房子の住む現実世界の住人になってしまったとき、菊子は信吾に奇跡を起こさせることができなくなるのである。

注(1) 武田勝彦・高橋新太郎『川端康成・現代の美意識』前出。七十九

- (2) 長谷川泉・鶴田欣也編『山の音』の分析研究』前出。五十二頁。
 (3) 川端文学研究会編『風韻の相克 山の音・千羽鶴・波千鳥』昭和五十四年九月二十五日 川端康成文学研究会 川端康成研究叢書 編集委員会 教育出版センター

第二節 桜の変遷

桜の若木は菊子の中絶した子供だと考えられる。

親木の根から、出ているらしく、独立した木ではなく、枝なのかもしれない。

修一は鋸で桜の若木を差しながら、

「お父さんがね、これを切るか切らないか、思案中なんだ。」と軽く笑った。

「それはお切りになった方がいいわ。」と菊子はあつさり答へた。

信吾は菊子に、

「枝か枝でないかは、ちよつとわからんのでね。」

「土のなかから、枝が出ることはありませんわ。」

このやりとりから分かるのは、菊子の潔癖である。八つ手と同じ土から生えている若木を、菊子は、あつさりと切ってしまった方が良いと言っている。それは、悪い状態の時に出来た子供は産みたくないという、菊子の心情の表れだと言えるであろう。信吾は、

自分がいやになりながら、しかし、菊子が流産した子供、この失はれた孫こそは、保子の姉の生まれがはりではなかつたらうか、そしてこの世には生を与へられぬ美女ではなかつたらうか、といふやうな妄想にとらえられ

とあるように、菊子の孫にまで、まだなお、姉の姿を見ようとする気持ちがあるぶん菊子のように、すっぱりと切る決心がつけられないのである。

修一が若木を切るのだが、修一は、「信吾の考えているやうなのが、ばからしいとみえる。」と捉えている。これは、修一が、信吾や菊子のように、自然を

無常感と結びついて悲しみの色を帯びることもあるが、逆に、雪月花の時最も友を思うというように、自然は、美的に味わい、また人と心を通わすよすがとなるものだから、喜びであつたり、なつかしさであつたり救いであつたりする。⁽¹⁾

ような感覚を持ち合わせた人間ではないからであろう。戦争に行つて修一は変わったと信吾が言うように、戦争で、合理的かつ、ニヒルなものの方を見方をするようになった修一にとって、桜の若木を切ることなどが、意味を持つことはないのである。

信吾は

「その、幹の裾の方の小さい枝は残しといてくれ。」

と挿し木の枝は残すようにする。この枝は、信吾にとつて、姉の血を引いた美しい孫が産まれるようにとの希望の若木であろう。菊子の背が伸びたとき、

失はれた子供の生命が、菊子の中でひびてゐるやうな、さういふ氣もしながら、信吾は家を出た。

とあるように、信吾は、なかなか、未練を断ち切れないのである。しかし、

「とにかく、この桜の枝はみな残して、自由に自然に、伸びるだけ伸ばしてやらうと思ふんだ。八つ手が邪魔だから取つてやつたんだ。」

というように、信吾なりに微力ながら、現実に向き合おうとする兆候も見られる。

だが、その挿し木についていた、桜の芽は、里子によつてむしりとられてしまう。このことを、鶴田欣也氏は、

この作品で桜は菊子と密接な関係を持たされているので、里子による桜の「切り」は意味深い。信吾の最初の「切り」の因果であり、信吾が最終的には自分から、菊子を切り離さなければならぬことの前提でもあろう。⁽²⁾

と、述べている。里子という醜い孫から、桜の芽をむしられるというのは、信吾の望む、姉の美しい血を引いた孫は産まれない、

という最後通告のようである。

そして、桜は終盤、木全体が弱っていく。

「いいえ、桜の葉が大方落ちてしまつてゐるでせう。虫でもついてゐるのかしら。まだこの桜の木で、ひぐらしが鳴いてゐるやうに思ふのに、もう葉がないんですよ。」

さう言ふうちにも、黄ばんだ葉がつついて散つて来た。風がないので、ひるがへることもなく、真直ぐに落ちた。

このことについて、鶴田欣也氏は

あれだけ観察力の鋭かった信吾がそれを発見するのではなくて、保子が見付けているのが興味深い。⁽³⁾

と述べている。『山の音』の中で、自然の機微を共有できるのは信吾と菊子の二人だけであった。それは、信吾が、信州を永遠に循環し続ける、もみじの世界であると位置づけているからであり、菊子は、その世界との霊媒であるからである。

保子は以前から、信吾に、

「あなたは、菊子をただ可愛がるばかりで、肝腎のことを解決しておやりにならないんだから。(略)」

「菊子を可愛がるばかりで、お父さんのは実がともなはないんだから。」

と指摘をしていたのだが、桜の変化に気付くのは、現実世界にの

み生きている保子であるこの時点で、信吾と菊子の共有するものはなくなつたと思われる。桜の木の衰弱も、もはや、菊子が桜のような抽象的に連想されるものではなく、現実そのものを生きる女になつていくことの表れであると言えるであらう。黄ばんだ葉の迷いのない落ち方は、菊子の意思であると考えられる。それは、「夢」の世界との決別であり、菊子の自立心の表れである。黄ばんだ葉は、信吾や修一への依存心であると言つても良いだらう。後に、房子が水商売をしたい、と言ひ出したときに、

「お姉様にもお出来になりますわ。女はみんな水商売が出来ますもの。」

「お姉さまがなされば、私だつてお手伝ひさせていただきますわ。」

という菊子には、以前、修一の浮気で悩み、

「別れてもお父様のところにお茶でもしてゆきたいと思ひますわ。」

と慈童の面の陰で涙を流すひ弱な面は残っていない。菊子は悲しみを乗り越えて、現実世界を生きていくと思われる。男と女が本当に結婚するとは、こういうことなのだろう。それは、とても世俗的で、信吾の持っているロマンティックな幻想世界とはまったく違うものである。

黄ばんだ葉を散らした後の桜は、また季節が一巡した後、花をつけるだろう。しかし、その桜が信吾を菊子に結び付けることはなくなるのである。それは、菊子と、桜の役割の終わりを表しているのである。

注(1) 羽鳥徹哉『山の音』における自然 前出。四十一頁。

(2) 鶴田欣也『川端康成論』前出。二百八十六頁。

(3) 前注に同じ。二百六頁。

第三章 戦争の傷跡

第一節 傷の痛み

当初、信吾は修一に対して偏愛があつた。それは、修一が美男だからである。また、理由は違えども、信吾が精神の麻痺と、退廃を修一と共有しているからである。しかし、戦争に行つてから、修一は変わったと信吾自身が言っているように、菊子や、絹子などに、残酷とも思える言動や、行動を取る。

川端はいつも結婚を矛盾として、地獄とした。戦後の作品では、結婚をしていても、いなくても、男女は結ばれる。結婚とは男对女の結婚の種々相の中の一つの様相に過ぎない。人間を悲劇的存在とするならば、戦前では、結婚がその原因で

あり、条件であつたのに、戦後では、人間そのもののありかたを家庭というより複雑な世界で追求する。⁽¹⁾

と吉村貞司氏は言っている。『山の音』はまさに、これに当てはまり、修一も絹子も、そして、菊子もこの結婚という枠組みで苦しんでいるのである。

しかし、修一や絹子のように、戦争による傷を負った者の苦しみと、菊子のように戦争の傷を知らない者の苦しみは、違うものなのである。

修一や絹子の発想の特色は、即物的で、合理的であるところにある。菊子の中絶費を絹子のところから持ち出したのも、どんな金でも、金は金だ、という修一の論理に基づいていた上での行動なのである。

「(略)僕はそんな感傷的な運命論者ぢやありませんよ。敵の鉄砲玉が耳すれすれにびゅんびゅん鳴つて通つて、一つもあたらなかつたんだ。中国や南方にだつて、落し子がうまれるかも知れない。落とし子と会つて知らずに別れるくらゐ、耳のそばを通る鉄砲玉にくらべたら、なんでもありませんよ。命の危険はない。(略)」

「(略)よその人を返すから、私の戦死した夫を返せ、絹子さんはそんなことを言ひ出しますよ。生きて返してくれさえ

したら、夫がどんなに浮気をしたつて、女をこしらへたつて、私は夫の好きなやうにしてあげる。池田さん、あなたはどうか、

と聞かれますと、それは夫に戦死された者は、私だつてさう思はないでございませぬ。絹子さんは、私たちは夫が戦争に行つても、辛抱してゐたぢやないの？そして死なれた後の私たちはどうなの？修一さんは私のところへ来たつて、死ぬ心配はないし、怪我もさせないで帰すんぢやないの？」

「お前は戦争に行つた夫を待つた経験がないだらう、帰るにしまつてゐる夫を待つてゐるだけぢやないか、さうおつしやい」

「贅沢な奥さんに私の気持ちはおわかりにならないわ。」

戦争で生活を破壊された者の屈折した心理をここに見ることが出来る。常識的なモラルは、こういう場では力を持たないのである。

磯貝英夫氏は、

生死の極限に身をおいて、命以外のすべてが、ぜいたくな余剰物とうつるようになった精神の姿を示している。実際、そういう余剰物をいだいては、苛酷な戦場を生き抜いてはこれなかつただろう。徹底した即物的、合理的な配慮だけが命を守るだろうし、そういう生は、もっぱら物質的、肉体的な自己解放へ走りもするだろう。そして、それが、習慣化

しては、一種の感情脱落がおこる。信吾がたいせつにしている、伝統のはぐくんできたあえかなもの、繊細な感情反応は、その風土では、無用な感傷になる。^②

と述べている。どんな悩みだつて、命の有無に関わる、または、戦後の後遺症に怯えながら生きる者の悩みに比べればなんでもない、という考え方が、そこに存在するのである。菊子への仕打ちも、戦争で直接、傷を負ったものが、傷を負っていない者を苦しめるといふ図式の上で成り立っているのである。結果的に突き詰めていくと、菊子の苦しみの原因も戦争によるものなのである。菊子の苦しみは、二次災害のような形で引き起こされたものなのである。

信吾は戦争中に性を失ったのであるが、修一は他人を受け入れる同情の機能をも破壊してしまったのである。信吾は菊子を通して回春に努めるものの愛の時点逆行することの不可能を悟り、回春の努力から菊子を解放しようとする。そして、それは他人への基本的な尊敬と同情によるもので、修一には欲情はあつても、肝腎なそれがない。それだけ、戦争の残したものは、人の価値観を変え、精神を退廃させてしまうものなのだ。

「今も新しい戦争が僕らを追つかけて来てゐるかもしれないし、僕らの中の前の戦争が亡霊のやうに僕らを追つかけてゐるかもしれないんです。」

という修一の言葉からは、途方もない絶望感が伝わってくる。その結果、修一は同じ戦争の傷を持つ絹子に向かう。

注(1) 吉村貞司『川端康成・美と伝統』昭和四十三年十二月十五日 学藝

書林 百二十五頁。

(2) 磯貝英夫『山の音』における家庭」前出。百二十九頁。

第二節 自立

修一と絹子が結び付いたのは、戦争による傷を持った者同士だったからである。同じ闇を持っているからお互いを慰めあうことが出来たのである。「相手はこんな小娘ではないのだらう」と信吾が睨んだとおり、精神の荒んだ修一には、肉体的にも、精神的にも幼い菊子では満たされないものがあつたのだと考えられる。絹子といるとき、修一は、心の奥の深い部分が出せたのではないだろうか。菊子が知らないでいながら、絹子から打ち寄せて来たものとは、自虐的ではあつても、修一が絹子と深い闇を共有すること得られる心の余裕であつたと考えることができるであろう。

吉村貞司氏は、

性は生理的な一致ではあるが、どんなに緊密な一致といえど

も、彼のよろこびは彼女のよろこび以外を知ることではできない。それならば性とは一致の錯覚があるだけで、実質において孤立が二つならんでいるだけである。彼らはわずかに精神のおぎないで、一致の錯覚を作りあげているにすぎない。¹⁾

と述べている。修一も絹子もこのことに、気付いていたと思われ。修一においては、精神においても、孤が二つ並んでいる、と捉えていたにちがいない。所詮、人間はそういうふうでしかありえないという諦念と、それが本当の生きざまだという意識との複合がある、と見てもよいかもしれない。

だから、絹子が身ごもったことを知ったとき、絹子に乱暴をして子供を産ませないようにしたのではないだろうか。人間はどこまで行っても、所詮は孤独であると悟ってしまった修一にとつては、血のつながりなどは、暖かさや、結びつきを感じさせるものではもはやないのであろう。二人の子は、戦争の傷跡を互いに舐めあつた結果、出来た子供であるので、生まれることによつて、傷が、子供という形になって目の前に現れるのを修一が恐れたとも考えられないだろうか。

結局、絹子は修一と破局の道をたどる。それは、絹子は、自活をした女性であり、「自由」の意識を持って生きている女性だからである。修一と、戦争の傷を舐めあうように愛しあつても、決し

て依存的な生き方をしてはいないからである。身ごもったことによつて、絹子の自立の意志はさらに強いものになる。それは、信吾がかるうじて守っている伝統的な家を凌駕するほどの強いものである。しかも、これは川端の意識的設定と考えられる。それは、房子が、飲み屋のスタンドを始めたと言ひ出し、菊子もそれに続こうとしていることから推し量ることができる。そして、絹子の自立が、修一の人間の絆への不信を強化したとしても、不思議はない。修一が、菊子を自由だと言つてのけた心情の根底には、この出来事も深く関係していると思われる。

川端の男達は、一夫多妻的な多角な女性体験を持つている。彼らは子供達を持つのを恐がる。長すぎる夫婦生活は罪をかもすだけであるから、男たちは愛情の持続者ではない。彼らは美女たちに運命を与え、あるいは変えるけれども、みずから運命の主人となることはない。運命をせおつて時間にむかつてきずきあげるのには女性の任務である。こう見て来ると、男性の意義は女たちにいかに純粹に、豊かに愛を与え、大生命にふれさせ、開花させるかにある。つまり、めるへえん風にいえば、眠れる王女を目ざめさせ、あるいは、呪縛をといて王女の姿に返らせる遍歴の王子の役目である。男たちはいかに虚しくとも、ドラマとしての美しさを要求されるわけで

ある。

と吉村貞司氏は述べている。修一は、この王子の役割を果たし、絹子を、そして、菊子をも自立の道へ導く。そして、その役目を終えた修一は、散々、女達を振り回したが、終盤、女達に影響を与えることはできなくなるのである。

現実世界の住人になった菊子もまた、自立の道を辿っていくことになるであろう。菊子の自立は、戦後の女性の必然性なのかもしれない。女性は、ただ美しいだけで、芸術品や鑑賞物でさえあれば良いという時代の終わりだというふうに捉えることが出来るのではないだろうか。保子の姉の時代は、信吾にとって、古き良き時代であり、現代を生きる美女には、いくら、美しいという共通点があったとしても、びたりと一致することはないのである。菊子は「新しい美女」として、自立の道を歩いて行くことだろうと予想されるのである。

注(1) 吉村貞司『川端康成、美と伝統』前出、九十六頁。

(2) 前注に同じ、二百四十一頁。

第四章 解放

「山の音」が死の音であるのと反対に、「天の音」というのがある。それは、信吾が菊子に、「菊子が私によくしてくれるのは、わたしを修一と錯覚してなんぢやないの？それでかへつてなほ、修一にへだてがあるやうに思ふんだよ。」

と諭す。そしてまた、修一が菊子は自由だと言ったと話し、

「うん、わたしもね、自分の女房が自由だとはどういふことだと、修一に反問したんだが、よく考へてみると、菊子はわたしからもつと自由になれ、わたしも菊子をもつと自由にしてやれといふ意味もあるかもしれないんだ。」

「わたしつてお父さまのことですか？」

「さう。菊子は自由だつて、わたしから菊子に言つてやつてくれ、と修一が言ふんだ。」

この時、天に音がした。ほんとうに信吾は天から音を聞いたと思つた。

見上げると、鳩が五六羽庭の上を低くななめに飛んで行つた。

羽鳥哉也氏は、

天の音、鳩は、キリスト教的イメージである。菊子を自分か

ら自由にしようという信吾の決意を、よしとする天からの声を、信吾が聞いたように思ったということであろう。⁽¹⁾

と述べている。信吾はこの十五ヶ月の間、自分を取り巻く自然、芸術などの夢の世界と現実の世界を行ったり来たりしていた。その媒介として、菊子を見ていたため、結果菊子の中絶という大きな犠牲をはらうことになってしまった。天の音は、信吾の菊子への思いの断絶、そして、信吾の菊子へのいたわりだと考えられる。そして、またそれは、信吾の戦前から戦後へという時代の流れに、意識を向けたことも大きく関係していると言えるであろう。信吾に残されたのは、「山の音」の世界である。信吾は、山の音や死へ向かう道の世界と引き換えに、菊子に「天の音」の世界を与えたのだということが出来るだろう。菊子にとってそれは、精神の解放であり、「自分らしさ」を見つける新たな旅立ちなのである。

注(1) 羽鳥徹哉『山の音』における自然」前出。五十九頁。

(二〇〇三年 卒業)